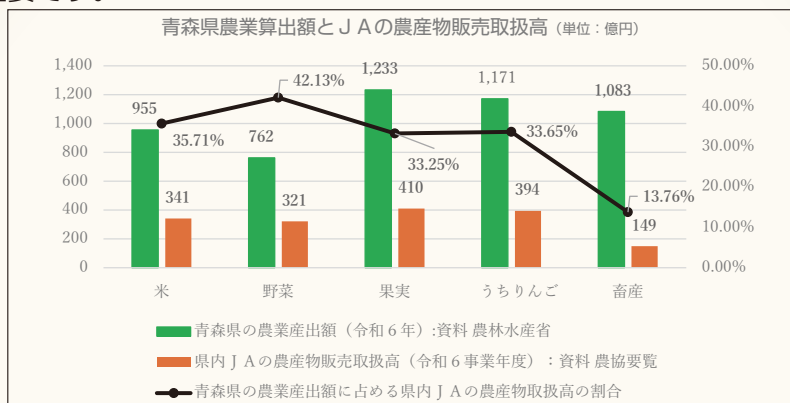


③将来予測（10年先を見据える）：10年後に組合員構成がどう変化しているかを予測し、それぞれの組合員との「目指す関係性」を計画に反映します。

【農産物取扱高のシェア拡大が鍵】令和6年の青森県内農産物販売高における「JAの農産物取扱割合」を見ると、依然として多くの農産物がJA以外で取引されています。この割合（シェア）を高めることこそが、経営基盤の強化に直結します。例えば、「低利用・未利用の組合員」を最優先ターゲットに設定し、彼らのニーズや課題を解決するための具体的なアプローチやサービス提供の計画を立てることが重要です。



（2）組織基盤強化方針の作成

現状把握を踏まえ、具体的な方針と計画を策定します。計画には、仲間づくり（組合員数の維持・拡大、新規利用者との接点強化、対話活動の強化等）や、女性・青年をはじめとする多様な組合員の参画促進メニューを盛り込みます。

以下は、組織基盤強化方針に盛り込むべき主な項目（事例）です。各JAの実態に応じて盛り込む内容を決めて、策定を進めます。

「次世代の確保」：新規就農者の育成・定着支援、次世代の正組合員の確保」

「家族の参画」：正組合員家族の組合員加入促進」

「理念の共有」：協同組合の仲間づくりの基礎となる「JA・協同組合理念」への理解促進」

「地域とのつながり」：食農教育などを契機とした、准組合員の加入促進や地域住民との関係づくり」

「組織の活性化」：女性組織・青年組織などの活性化、盟友・メンバーの仲間づくり支援」

「運営への参画」：女性や青年農業者の組合員加入、総代・理事等への登用による「多様な声の反映」」

「協同活動の強化」：生産部会や支所・支店運営委員会などの組合員組織、協同活動参加者とのつながり強化」

3. 最後に

組織基盤の強化は、事業基盤や経営基盤を支えるために、欠かすことのできない「土台づくり」です。

本会では、各JAにおける方針・計画作成を支援するため、「組合員アンケートの活用支援」や「組織基盤強化推進マニュアル」、「JA組織基盤強化に向けた施策事例集100選」などのツールを提供いたしますので、積極的にご活用くださるようお願いいたします。

JA青森中央会

絆 8 目次 KIZUNA CONTENTS

巻頭言	1	組織農政通信	18
特集	3	経営の窓口	19
フラッシュ	6	JA八戸NEWS	21
Moving Forward	8	輝き・部会のチカラ	22
インフォメーション	10	新風	23
あおもり通信	17		

表紙の写真：新・農のある風景 ～其の125～ プラム出荷最盛期（JA八戸）

特集

改正食糧法

「需要に応じた米生産
国の精緻な見通し鍵に」

中央会 農業対策部



改正食糧法が7月8日、成立した。新たに規定する「需要に応じた生産」では、米の需給を均衡させることで価格の安定を目指す、国の需給見通しの精度向上が課題になる。

需給緩和への懸念も強まる中、需給のバランスが崩れた場合の対応も焦点だ。

令和8年7月8日、9日付「日本農業新聞」に記事が掲載されたので紹介する。

改正食糧法のポイント

民間備蓄	流通実態の把握
■備蓄量 民間20万トン程度、政府80万トン程度で、総量は100万トン程度を維持 ■対象事業者 出荷・販売量が年10万トン以上の約10社 ■仕組み ・在庫として常時保有すべき「基準保有量」を定め、不足時は引き下げて放出 ・保有や放出の命令違反には罰金 ・国が必要な財政措置を実施 ■開始時期 26年度に実証、28年度にも開始	■米を扱う届け出を求める事業者に、加工や中・外食を追加 ■在庫量などの定期報告を創設、年300トン以上扱う出荷・販売事業者は月1回、小規模事業者は年1回
	需要に応じた生産
	■「生産調整」の規定を「需要に応じた生産」に改め、生産者が主体的に努力するよう規定 ■政府は需要開拓などの施策を行う

1. 需給緩和どう対応

(1) 自らの経営判断

「需要に応じた生産」の規定は、2018年産から産地に生産数量目標を配分しない政策に移行したことを踏まえた。農水省は、生産者が需給動向を踏まえ、「自らの経営判断によって作付けを行う」こととする。

(2) 需給見通しの難しさ

判断に欠かせないのが、国が示す需給見通しの正確性だ。今回の米不足では、毎年10万トンずつ減るとしてきた需要の傾向が変化していたのに加え、猛暑で精米歩留まりが悪化するなど、需要量や生産量を正確に見通す難しさが露呈していた。

(3) 需給見通しの見直し

これを受け同省は昨年、直近の消費実績などを基に見通しを算出するよう見直した。法改正で、事業者から在庫量などの情報を定期的に得られる仕組みを設け、流通状況を見通しに反映できるように

もした。需要の増減の兆候を見落とさず、見通しを精緻にできるかが課題になる。

(4) 見通しが乖離した場合

国会審議では、見通しが実態と乖離（かいり）し、需給が大幅に緩和した場合の対応も論点となった。政府は、長期的な販売などに取り組む産地を支援する事業に加え、収入保険など既存のセーフティネット（安全網）対策を推進する方針だ。生産コストを下回る取引を防ぐための米の「コスト指標」が4月から動き出したこともあり、安全網対策の拡充には慎重な姿勢を示す。

(5) 需給緩和の懸念

一方、足元では民間在庫が積み上がり、需給緩和の懸念が高まる。衆参農林水産委員会では、需給バランスが崩れた場合の政府の対応を求める付帯決議も採択した。野党からは、27年度からの新たな水田政策で安全網対策の充実を検討するよう求める声も上がる。

2. 民間備蓄 実効性は

(1) 28年度からの制度導入を目指す

米の備蓄制度も大きく転換させる。新設する民間備蓄制度では、備蓄の一部を卸や集荷が保有し、供給の不足時には、事業者には保有を義務付ける量を引き下げて在庫の取り崩しを指示する。政府は28年度からの制度導入を目指す。

(2) 具体化はこれから

課題は、有事に機能する制度となるかどうかだ。放出を判断する基準や地域の偏りなく流通させる運用方法などの具体化はこれから。同省は本年度に行う実証事業で確認するとする。同省は、保有義務を課す事業者は10社程度を想定する。事業者からは、保管経費や買い入れ時と販売時の価格の差損などへの助成を求める声上がる。同法では、国が必要な財政支援を措置すると規定しており、十分な支援を用意できるかが課題となる。

3. 政府備蓄も改善へ

(1) 機動性高める

政府備蓄の機動性も高められるよう、運用改善も検討する。昨年の放出は価格を下げる目的だったが、今後は「量」に着目して運用する考えも打ち出す。

(2) 保管期間

焦点となるのが保管期間だ。米が古くなるほど品質の確認に時間がかかったことから、現行の5年程度を短縮する案も検討されている。仮に4年で放出すれば、買い入れ量は毎年20万トンほどと試算され、市場から隔離する効果は現行と変わらないとみられる。

(3) 買い戻し

100万トン程度を適正とする備蓄量は現在、32万トンまで減っている。このうち20年産の15万トンは主食用以外として販売する見通しで、全量落札となった26年産の21万トンの買い入れ分を足しても、備蓄量は38万トンにとどまる。

災害などに備えるため、放出した59万トンの早期の買い入れ・買い戻しが課題だ。

財務省は、緊急時には輸入米のミニマムアクセス（最低輸入機会＝MA）米を活用することで備蓄水準の減少を検討すべきだと指摘してきた。ただ、米は国内で自給できる品目であり、食料安全保障の根幹である備蓄は引き続き国産で行うことが欠かせない。

4. 米需給安定は国の責務

～「参院農林水産委員会」 改正食糧法で付帯決議～

参院農林水産委員会は7月7日、米の安定供給に向けた食糧法の改正案を、与党などの賛成多数で

可決した。米の「需要に応じた生産」へ、政府の責任で需要の創出と、需要を満たす生産を実現するよう求める付帯決議も採択。需給安定への政府の責任は今後も変わらないとし、必要な策を講じることも求めた。

(1) 需要の開拓を

改正案では、需要が減り続けることを前提とした「生産調整」の規定を廃止。代わりに「需要に応じた生産」を規定し、生産者が主体的に努力するよう求める。国内外での需要開拓などで「需要に応じた生産」を促進することも政府の責務として明記する。

(2) 需要の創出に必要な施策を

政府は「需要に応じた生産」について、主食用や米粉用、輸出用などの多様な用途の米の需要を創出した上で、需要を満たすよう生産することだと説明。これに対し付帯決議では、実現のために必要な施策を行うよう求めた。

(3) 需給の安定に責任を

「需要に応じた生産」を規定することに対しては、政府が需給の安定に責任を負うことは、改正法施行後も何ら変わらないと確認する項目も盛り込んだ。

(4) 需給の安定のために必要な施策を

米の需給バランスが崩れた場合は、需給の安定のために必要な施策を行うことも必要とした。「生産調整」の規定を廃止しても、麦や大豆の生産を振興して「田畑のフル活用」を進めることの必要性も明記した。

令和8年7月8日（水）・9日（木）
「日本農業新聞」記事より

●最後に

改正食糧法は流通を正確に把握し、備蓄米を機動的に放出できるよう、“令和の米騒動”の反省を踏まえ、短期的な米不足への対応を整備した。

ただ、中長期的な米の安定生産をどう確保するかは見えておらず、今後の具体策づくりを注視していく必要がある。



フラッシュ

JA青森



りんご出荷者大会（7/14）

青森市の浪岡中央公民館で「りんご出荷者大会」を開催し、優良りんご出荷者を表彰した。大会には出荷農家など関係者約100人が出席し、その中の報告では、りんごの販売動向について「昨年秋までは数量減・単価高で推移していたが、それ以降は数量増・単価安の傾向にある。春先から初夏にかけての安定した気象条件が数量増に寄与した」と分析した。

最後に、当JAりんご部会連絡協議会の木村祐尚会長が「高品質なりんごを多くの消費者に届けるため、厳しい環境にも屈せず、生産者一同で全力を尽くす」と決意を語った。



JAどしよつがる

つがるメロン出荷式 糖度高く出来良好（7/21）

つがる市、当JAなどで構成する「つがるブランド推進会議」は、つがるブランド認定メロンの出荷式を木造総合支店で開催した。7月から9月にかけて、県内や全国の市場に出荷し、出荷数量は15万箱（1,100㍻）、販売額5億円を目指す。

今年産は昼夜の寒暖差に恵まれ、糖度が高く甘味ののったメロンに仕上がった。推進会議会長の倉光弘昭つがる市長は「生産者と伴走し、おいしいメロンを全国へ届けたい」と話した。

作業手順を徹底確認 女性のための仕上げ摘果講習会開催（6/16）

当JAは田澤俊明さんの園地で「女性のための仕上げ摘果講習会」を開き、女性部員や地域住民ら12人が参加した。講師を務めた田澤さんは、今年の生育状況や摘果のポイントについて解説した。

今回初めて受講した参加者は、「講習会に参加して良かった。畑を手伝うようになったが、講習会に参加して勉強になった」と感想を話した。作業の手順を忘れないようにスマートフォンで動画撮影したり、自身の園地での実践のために、熱心に説明に耳を傾けていた。

JAつがるにしきた



JA管内の自治体へ鳥獣害対策資材を贈呈（7/15）

当JAは鳥獣害対策支援として、クマ用スプレー、箱罠、動物駆逐用煙火の贈呈式を行った。15日は、つがる市、鶴田町、鱈ヶ沢町、五所川原市を訪問。各自治体の首長は「アライグマやサルに加え、クマによる被害も深刻化している。猟友会などと連携し、有効に活用したい」と謝意を示した。

成田春光組合長は「今後も管内の自治体と連携し、地域農業を守っていきたい」と話した。

JAつがる弘前



全力でサポート 新規作付者全園地巡回（6/24）

当JAでは、春先から夏場にかけての収入確保と継続した労働力確保のため、りんごと複合経営としてピーマンなどの作付けを推奨している。

当JA生産係の鈴木美喜子係長は「現場に向いての指導を徹底し、セミナーでは伝えきれない生育管理などを個々に伝えている。安心して取組めるよう生産者に寄り添い、所得向上に取組む」と意欲を見せた。

JA相馬村



JA津軽みらい



簡単に作れる料理学ぶ

JA津軽みらい女性部黒石支部（7/15）

当JA女性部黒石支部は、黒石支店で料理教室を開催した。当JA広報誌で「超簡単レシピ」を紹介している水嶋優子さんを講師に招き、家庭で気軽に作れる料理を学んだ。

料理教室では、夏のドライカレー・豚こま切れ肉の生姜焼き・きゅうりの漬物・キャベツとコーンのサラダ・みかんのムース・コーヒーゼリーの6品を作った。参加した女性部員は「楽しく、おいしい料理が出来上がって良かった」と笑顔で話した。

JAゆうき青森



野辺地町でしゃかしゃかおむすび&

みそ玉づくり教室開催（7/10）

当JA女性部は、野辺地町のわかば保育園で「しゃかしゃかおむすび&みそ玉づくり教室」を開催した。同園の年長クラス12人の園児が参加し、女性部員やJA職員が園児たちをサポートした。

園児らは県産米「まっしぐら」を使用したおにぎり作りで、ご飯を入れた紙コップを両手で「しゃかしゃか」と振っておむすび作りを楽しんだ。

園児らは「可愛く出来て楽しかった。おうちでも作りたい」と満足気だった。

JA十和田おいらせ



十和田おいらせ 品質管理徹底して

夏秋ピーマン目ざろえ会（6/23）

当JAの十和田やさいセンターで夏秋ピーマンの目ざろえ会を開いた。味、品質の良さが自慢の「TOM-VEG Eピーマン」のブランド名で売り込んでいく。

目ざろえ会では生産農家ら34人が品質や大きさの基準などを確認。栽培歴30年で、今年度1000本の苗を定植した小山田英子さんは「生育は順調で、病害虫の影響を受けないように、徹底管理している。最後の収穫までしっかり管理し、高品質でおいしいピーマンを届けたい」と意気込む。

ネギ生育促進 土づくりと病害対策確認（6/4）

JA八戸ねぎ専門部は管内4ヶ所で栽培講習会を行い、土壌診断に基づいた土づくりと培土時期、病害対策のポイントを確認した。県三八農林水産事務所農業普及振興室によると、定植後は降雨が少なく乾燥傾向にあるため、ネギの生育は遅れて推移。薬剤散布は、予防散布を主体とし、系統の異なる薬剤をローテーション散布するよう呼びかけた。

同農業普及振興室の木下貴之主幹は「生育が遅れている圃場では、葉面散布剤を活用し生育促進に努めてほしい」と話した。

JAおいらせ



ニンニクの収穫・根切り 若手職員が体験（6/17）

当JAの入組5年目までの若手職員10人は、農業体験研修の一環として、三沢市にある60㌥のJAにんにく採種圃でニンニクの収穫・根切り作業を行った。

研修を主導した当JA指導課は「採取圃での収穫は大変な作業だが、ともに作業したことで職員間の団結力が高まった」と成果を強調した。また、農業現場の苦労を実体験することで、今後の組合員への指導や相談対応の質向上にも繋げたい考えだ。

JA八戸



Moving
Forward

各連合会の取組みを紹介します

農林総合研究所参観デー & りんご研究所参観デー へ参加しよう！

農林中央金庫は、ＪＡの取組みを支援することで、ＪＡバンクの「農業・暮らし・地域領域の多様なニーズに対して、総合事業性を活かした金融仲介機能を発揮し、支持・期待され続けている姿」を目指しています。

ＪＡバンク青森として参加予定のイベント

行政主催

○農林総合研究所参観デー：農業研究の現場を体験できるイベント

そのほか、お花等の販売会や農業相談コーナー、病害虫・雑草の標本展示なども実施

○りんご研究所参観デー：りんご研究所参観が可能なイベント

そのほか、りんごに関する座談会や、研究員の解説付きの圃場見学ツアー、各種物販、農業機械展示なども実施

農林中央金庫のイベント参加による取組み



ＪＡグループ全体の認知度向上
地域貢献を通じて、ブランド価値を高める



普段接点の少ない地域住民や若年層との接点を創出
新たな相談や情報取得の機会を提供



農業融資などの相談にその場で対応可能
営農やローンなど、幅広い相談が可能

☆組合員の皆様にとっても幅広い相談や情報取得ができる絶好のチャンス☆
是非ご来場ください!!

持てるすべてを「いのち」に向けて。
Dedicated to sustaining all life.

農林中央金庫



こく しょう こく さん 国消国産で いいこといっぱい!

いいこと! 食料自給率に貢献!



いいこと! 地域の農業を元気に!



いいこと! 日本・地域の景観を守る!



いいこと! 日本・郷土の食文化を守る!



いいこと! 新鮮で安心!



いいこと! SDGsに貢献!



「国消国産」は、「私たちの国で消費する食べ物は、できるだけこの国で生産する」という考え方です。「国消国産」を進めると、いいこといっぱい。未来に「食」の安心をつなげていくために、いっしょに「国消国産」を進めていきましょう。

特設
サイトは
こちら!



いっしょに、国消国産。



美少女ちゃん X HELLO KITTY © みんなの食生活プロジェクト © 2025 SANRIO CO., LTD. APPHONAL NO. 1003809

若手・中堅営農指導員らが営農指導の本来業務専念など手法を協議・研究 営農指導事業 meeting

J A 青森中央会は令和 8 年 3 月に大幅改訂を行った「営農指導事業機能・体制強化方針」に基づき、営農指導員が本来業務たる営農指導により専念できる環境整備のための業務棚卸などの実施や、農家組合員との信頼関係を強める武器となる知識・技術の修得といった人材育成の重要性などを改めて強く打ち出した。

この同方針の改訂の底には、J A 営農指導員が本来業務に専念することが難しくなるほど多くの高度で幅広い分野に渡った業務を抱える実態があり、中央会ではそれをいかに整理・緩和し、営農指導業務への専念化をすすめるか模索するため、また、営農指導員同士で「課題の共有」や「解決策を検討」をする場を提供することを目的に、各 J A から若手・中堅クラスの営農指導員らをメンバーに推薦してもらい協議・研究・成果発表まで行う「営農指導事業 meeting」を2023年度から年4回開催している。

令和8年3月には、3年分の成果発表などを取りまとめた小冊子を発行し、J A 営農指導事業の発展・改善に役立ててもらおうと県内 J A 営農担当部署に配布した。

中央会は6月25日、「令和8年度第1回営農指導事業 meeting」を県農協会館で開催し、県内5 J A から若手・中堅営農指導員ら6人が参加した。

今年度のテーマは「他部門の兼務」・「組合員組織の事務」・「営農指導事業の強化」の3つで、第1回となる今回は「他部門の兼務」をテーマとした。

ミーティングに先だち、開始当初からオブザーバーとして参加する酪農学園大学農食環境学群循環農学類農食法制度論研究室准教授の正木卓氏と弘前大学の農学生命科学部国際園芸農学科助教の林田大志氏が、小冊子を使ってミーティングの意義や狙い、営農指導事業を取り巻く状況などの講義を行った。

今回初顔合わせとなった参加者たちは、グループワークを行いながら親睦を深め、学んだことや



▲グループワークで意見を出し合う参加者たち

日頃感じていた業務への疑問等を話し合っていた。

農業支援課は「この取組みを通じて営農指導員が抱える課題等を見える化して、日常業務の改善からひいては営農指導事業全体の発展に繋がれば」と話し、今年度のメンバーによる協議・研究の進展に期待感を表した。

和菓子づくり体験やフードバンクの取組みを学ぶ J A 青森中央会生活指導員研修

県農協生活指導員連絡協議会は7月3日、青森県総合社会教育センターで「青森県農協生活指導員連絡協議会第1回研修会」を開催し、県内 J A の生活指導員20人が参加。地域課題への対応力を高めるため、食料支援の現状と日本の伝統技術を学ぶ2つのプログラムを実施した。

午前は社会福祉法人青森県社会福祉協議会の倉内智史主査が講師を務め、「あおもりフードバンクの取組紹介」をテーマに学習した。倉内主査は、生活困窮者や子育て世帯に対する食料支援活動の重要性や、社会福祉施設と連携した就労体験プログラムの取組みについて説明した。参加した指導員らは、地域住民の福祉向上に向けた具体的な支援策について理解を深めた。

午後は、五所川原市在住の小松ゆり子さんを講師に、練り切りづくりを体験した。参加者は練り切りづくりを通じ、四季の風情を表現する伝統菓子の奥深さに触れた。練り切りは、白あんを細工することで桜や梅、うさぎなど季節のモチーフを表現する日本独自の文化。指導員らは体験を通じて地域文化の継承や豊かな暮らしの実現に向けて知見を広めた。

指導員からは「初めての参加でとても緊張していたが、非常に興味深い内容で、熱中しているうちにあっという間に時間が過ぎた」と充実した様子だった。



▲練り切りづくりをする生活指導員ら

地域を牽引する営農リーダー目指し営農部門の管理・監督職が研修受講

J A 青森中央会は令和8年3月、「営農指導事業機能・体制強化方針」のおよそ8年ぶりとなる大幅改訂を行った。

本改訂は、ＪＡにおいて営農指導事業が中核事業であることを明記するとともに、営農指導員のキャリアアップを支援する「営農指導員教育体系」を盛り込んで、ＪＡの営農指導力の維持・向上を強力に後押しする内容となっている。

中央会は７月９日と１０日の２日間、「営農指導事業機能・体制強化方針」に基づく人材育成の一環として「営農部門管理・監督職研修会」を県農協会館で開催した。

本研修の目的は、営農部門の管理・監督職に必要とされる政策知識や組織運営、課題の解決力を養い、地域の営農を牽引するリーダーを育成することで、中央会が３月に改訂した「機能・体制強化方針」の教育体系に基づき本研修を開催するのは今回が初めて。

２日間の研修会には、県内５ＪＡから新任の営農担当管理・監督職の職員８人が参加した。

研修では、昨今の農業情勢やＪＡ全国大会・青森県大会決議の内容、「よりよい営農活動・環境調和型農業」の実践状況、「営農指導事業機能・体制強化方針」に基づく業務改善や人材育成、新規就農者を含む担い手支援と事業間連携を重視する「総合事業提案」、地域振興計画の策定とその実践、農業関連税務・青色申告、そして日本農業新聞の「ＡＩ金次郎」の業務への活用事例など多岐にわたる内容を学んだ。



▲真剣に聞き入る新任の営農担当管理・監督職の職員

営農指導事業機能・体制強化方針

～営農指導員の人材育成（教育体系）と営農指導事業の機能～



2026年3月

青森県農業協同組合中央会

▲３月に大幅改訂した「営農指導事業機能・体制強化方針」

農業支援課では、「農業労働力の確保や組合員満足度の向上、そのためのＪＡ職員のスキルアップなどさまざまな課題への対応は、地域農業を牽引する立場にある営農部門の幹部職員の知識や意識、情報把握力、課題解決能力などの向上が不可欠」と話し、今後もＪＡの営農指導事業強化の取組みを継続していくこととしている。

行事（８／１０～９／１０）

８月

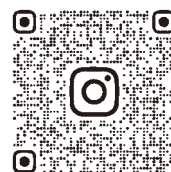
- 17～21日 次世代リーダー育成研修会ユニット２（山形市 協同の杜）
- 18日 第２回採用力向上に向けてのＳＮＳ・ＡＩ活用実践セミナー（県総合社会教育センター）
- 19日 ＪＡ事務リスク管理研修会（県農協会館）
- 21日 ＪＡ青森中央会ＯＢ会定例会（ウエディングプラザ アラスカ）
- 25～27日 認証中級準備研修会（県農協会館、ＷＥＢ）
- 28日 次世代リーダーフォロー研修会（県農協会館）
- 29日 社会科副読本「いのちはぐくむ あおもりの農林水産業」第１回編集委員会（アスパム）
- 31日 名久井農業高校生によるＪＡ施設見学（ＪＡ八戸）

９月

- １～２日 令和８年度 東北・北海道地区道県連会長会議（グランメール山海荘）
- １日 新採用職員フォロー研修会（県農協会館）
- ４日 役員コンプライアンス研修会（県農協会館）
- ８～９日 認証上級準備研修会（県農協会館、ＷＥＢ）
- 10日 定例理事会（県農協会館）

SNSアカウント紹介

青森県の農業の魅力やＪＡグループ青森の取組みを紹介。
イベント情報もあります。



@JA_CHUOKAI_AOMORI25

おにぎり教室の開催

JA全農あおもりと青森米本部は7月6日、青森市の認定こども園青森幼稚園で、食育イベントを開催した。

園児112名が参加し、全農あおもりが制作した食育絵本「おにぎりのやくそく」の読み聞かせやダンス、おにぎり教室などを楽しんだ。

イベントでは、クリーンライスレディあおもりの中城里奈さんが「おにぎりのやくそく」の読み聞かせを行い、園児たちは青森の農畜産物をテーマにした物語に聞き入った。会場には青森米応援キャラクター「お米大使」も登場し、園児たちと一緒にモリモリダンスを楽しんだ。

また、年長組31名はおにぎり教室に参加し、炊きたての青天の霹靂でおにぎりを作り、あおもり米の美味しさを堪能した。

このイベントは、子どもたちに食べることの大切さや楽しさを知ってもらい、県産品への親しみを持ってもらうことを目的に開催している。

今年は11月まで県内各地の保育園や幼稚園30園で開催する予定。



▲おにぎりを作る園児

令和8年度主要やさい販売要請会議の開催

JA全農あおもりは7月6日、7日、大阪と東京の会場で令和8年度主要やさい販売要請会議を開いた。両日で取引青果会社36社と関係者ら58名が出席した。

全農あおもり運営委員会の乙部輝雄会長は、「産地においては、生産資材の高騰や輸送経費の増加に加え、鳥獣被害の頻発など農家経営が圧迫されている。今後も各青果会社と協力しながら農家所得の向上に取り組みたい。」と話した。

要請会議では、夏秋やさいを中心にナガイモ・ニンニクなどの生産状況や、7月以降の出荷計画・販売対策を説明。各取引青果会社からは販売情勢や今後の見通しが報告された。

出席した各運営委員・JA組合長からは取引青

果会社に対し、やさいの生産・流通コストを意識した販売に加え、消費者に対する価格面での理解醸成への協力について要請がなされた。

各取引青果会社からは、「これからが青森県産やさいの販売の本番であり、正確な産地情報を共有した上で、それぞれの青果会社が特徴を持った販売をしていく」とした考えが示され、産地・消費地一体となって販売目標達成に取り組むこととした。



自律走行A Iロボット「Adam（アダム）」の納品

JA全農あおもりは7月16日、青森市の県農協会館で自律走行A Iロボット「Adam（アダム）」の納品を受け、開発元の担当者による実演会が行われた。

「Adam」は、東北大学発スタートアップの輝翠株式会社（宮城県仙台市）が開発したオフロード型自律走行ロボットで、果樹園や農地などの不整地でも安定した走行が可能なことが特徴。運搬作業や草刈り、肥料・除草剤散布など幅広い作業にも対応できることが紹介された。

会場では、自律走行機能を活用した走行デモンストレーションが行われ、参加者はロボットの走行性能や操作性を確認した。

全農あおもりでは、実際の農作業現場で活用しながら効果検証を進め、スマート農業技術の導入拡大に向けた取り組みを進めていく。



▲「Adam」の操作説明をする担当者

毒物劇物取扱者試験講習会の開催

J A全農あおもりは7月21日、青森市の県農協会館で毒物劇物取扱者試験講習会を開き、県内J Aから農業担当者40人（オンライン含む）が出席。9月4日の試験合格を目指し、毒物・劇物に関する法規や性質、貯蔵や取扱方法について学んだ。

全農あおもり購買部購買総合課の成田巨樹課長は「県内における直近の合格率は依然として低い状況。試験に向けポイントを押さえ、資格取得に努めて欲しい」と呼びかけた。

講習会では、テキストを基に講師の解説を交えながら内容の確認と対策について理解を深めた。



▲毒物劇物取扱について学ぶ参加者

「令和8年度花き共進会」の開催

J A全農あおもりは7月24日、青森市の県観光物産館アスパムで「令和8年度花き共進会」の審査を実施した。

県内のJ A系統花き生産者から輪ギク、トルコギキョウ、アルストロメリアなど計61点の出品があり、最優秀賞（青森県知事賞）にJ A青森の川村仁さんが出品したトルコギキョウ（ボヤージュベビーピンク）が選ばれた。

共進会は県産花きを広く県民に紹介し消費拡大を図るとともに、優れた花きを展示・評価することで生産者の生産意欲高揚と栽培技術の向上を目的に行っている。

最優秀賞以外の上位入賞者は次の通り。

▽優秀賞＝藤森光明（輪ギク・J Aごしょつがる）



▲県産花きを審査する関係者

▽金賞＝小笠原厚子（カラー・J A青森）工藤安三（スプレーギク・J A八戸）古川智英（アルストロメリア・J A津軽みらい）小見山晴雄（トルコギキョウ・J Aつがるにしきた）角沢孝夫（ディスプレイバッドマム・J A八戸）

模擬セリ体験会の開催

J A全農あおもりは7月25日、青森県観光物産館アスパムで「令和8年度花き共進会」に合わせた模擬セリ体験会を開いた。来場者は本物の市場さながらの模擬セリに参加し、お目当ての花を競り落として楽しんだ。

会場には共進会に出品された県産の切り花が並び、花き市場のセリ人が進行役を担当。参加者は番号札を掲げながら次々と価格を競り上げ、会場は活気に包まれた。

模擬セリで販売された花きの売上金は、「青森県花のくにづくり推進協議会」を通じて県産花きのPR活動などに活用される。



▲模擬セリに参加する来場者



行事（8/10～9/10）

8月

- 20日 J A－S Sオイル講習会
（全農Aコープ(株)青森営業所）
- 20日 J A－S S防災講習会
（全農Aコープ(株)青森営業所）
- 22日 あおもりやさいアドベンチャー
（CiiNACiiNA 青森）
- 25日 令和8年度りんご販売懇談会
（アートホテル弘前シティ）

9月

- 4日 青森県乳用牛共進会
（青森県家畜市場）
- 10日 運営委員会（県農協会館）

共済事業担当常勤理事会議の開催

J A 共済連青森は7月7日、アップルパレス青森にて共済事業担当常勤理事会議を開催した。

本会議は、第1四半期の取組み結果および普及推進活動計画の進捗状況を踏まえ、第2四半期に取組むべき事項を明確にし、目標達成に向けた取組みについて協議することを目的に行われた。

開会に際し、葛西本部長は「常日頃より現場で陣頭指揮を執っていただいていることに感謝する。第2四半期の計画に対する各J Aの取組みを常勤理事の方々と共有させていただき、次のステップに向けた契機とするべく忌憚のないご意見をいただきたい。」と挨拶した。

会議では令和7年度決算概要、令和8年度第1四半期の取組み結果ならびに第2四半期の取組み、地域・農業活性化の取組み、共栄火災の取組みについて協議された。



▲開会にあたり挨拶する葛西本部長

生徒向け自転車交通安全教室の開催

J A 共済連青森は、青森県警察本部と連携し、7月9日八戸市立第一中学校にて、「生徒向け自転車交通安全教室」を開催した。

この教室は、プロのスタントマンが危険な自転車走行により発生する交通事故を実演し、事故の衝撃や恐ろしさを疑似体感することで、ルールやマナー違反が交通事故につながる危険性について考える機会を提供するとともに、自転車走行における交通ルールの理解と実践を呼びかけている。

参加した生徒たちは、衝突の瞬間に驚きの声をあげるなど、事故の衝撃を肌で感じていた。



▲自転車と自動車の交通事故を迫力のスタントで実演（八戸市立第一中学校）

支店管理者交流集会の開催

J A 共済連青森は7月10日、ホテル青森にて支店管理者交流集会を開催した。

本交流集会は、支店運営にかかる管理者の役割の確認、L A生産性の向上およびスマイルサポーターとL Aの連携にかかる協議と情報共有を目的に行われた。

開会にあたり、福田副本部長が挨拶し「J A 共済事業の推進活動の中心となるL Aと、窓口業務およびL Aへの連携を担うスマイルサポーターが推進業務の中心となるが、それらを指導・支援する役割が支店管理者となる。管理者同士交流を深め、何かひとつでも持ち帰り実践してほしい。」と述べた。

交流集会では、クリアビジョン株式会社の杉野雄二氏を講師に迎え、「生産性を高めるには??」をテーマに研修が行われた。参加者は、支店管理者としての役割や課題を改めて確認するとともに、L A・スマイルサポーターとの連携強化や、支店全体の推進力向上に向けた関わり方などについて理解を深めた。



▲課題と解決策を共有することで、交流が深まった

J A 共済ヘルスアップ講座の開催

J A 共済連青森は7月15日、プラザマリユウ五所川原にて「J A 共済ヘルスアップ講座」を開催し、青森・五所川原地区のJ A組合員とその家族、地域住民など約300名が参加した。

本講座は、健康に関する講演およびヘルスチェックを通じて、健康維持・管理に対する意識の向上を目的に行われた。

開会にあたり、葛西本部長は「猛暑のなか、当講座の趣旨に賛同しお集りいただいたことに感謝します。本会の健康づくりと健康意識の向上に向けた取組みを通じて、地域の皆さまに貢献したい



▲開会にあたり挨拶する葛西本部長

と考えています。本日は楽しみながら、健康について考えていただきたい。」と述べた。

次に、ステージ上の講師の実演のもとで、参加者全員でレインボー体操が行われた。レインボー体操とは、JA共済が昭和58年にJA女性組織の皆さんの健康づくりのために開発した体操で、リハビリ体操から生まれたことから椅子に座ったままで行うことができる。

講師の活気あふれる実演に合わせて、参加者も積極的に体を動かし、会場は一体感に包まれた。



▲レインボー体操により会場全体の一体感が増した

続いて、弘前大学名誉教授の中路重之氏による「目からウロコの健康の話」と題した講演が行われた。日本一の短命県である青森県民の平均寿命や県内の取り組み事例、QOL（啓発）健診などについてデータを交えた説明があり、参加者は青森県の健康課題について理解を深めるとともに、ユーモアを交えた講演に真剣かつ和やかな様子で耳を傾けていた。



▲データとユーモアを交えた興味深い内容で講演する中路教授

昼食では青森県産食材をふんだんに使用した彩り豊かな「JA健康寿命100歳弁当」に舌鼓を打った。

休憩時間にはロビーに設置された「健康づくりブース」にて、青森県生活協同組合連合会の協力のもと、ベジチェック・立ち上がりボックス・血圧計・体組成計・握力計を使用した健康測定が行われた。参加者は測定結果を確認しながら、自身の健康状態への関心を高めていた。



▲「JA健康寿命100歳弁当」に舌鼓を打つ参加者



▲測定を受けている参加者

午後は、社会福祉法人 農協共済中伊豆リハビリテーションセンター、地域連携推進部 部長 理学療法士の山中真一氏による「フレイル・関節痛の基礎知識と予防体操」と題した講演が行われた。ユーモアを交えた分かりやすい説明に、会場からはたびたび笑い声が上がリ、参加者は和やかな雰囲気の中で健康に関する知識や予防体操について学んだ。

講座の最後には、国民的人気番組に出演している落語家の桂宮治が落語を披露した。会場は参加者の笑いに包まれ、大盛況のうちに講座を締めくくった。



▲終始くつろいだ雰囲気で進行した山中氏の講演

行事（8/10～9/10）

8月

- 18・19日 JA審査員養成研修会（自動車引受コース）（県農協会館）
- 19日 JA共済ヘルスアップ講座（アートホテル弘前シティ）
- 20日 共済契約税務研修会（個人篇）（オンライン）
- 21日 共済契約税務研修会（法人篇）（オンライン）
- 21日 JA自然災害損害調査有資格者研修会（オンライン）
- 26・27日 公的保険研修会（オンライン）
- 28日 JA自然災害損害調査有資格者研修会（オンライン）

9月

- 3日 LAステップアップ研修 推進コミュニケーション力強化コース（県農協会館）
- 8日 安心サポーターフォロー研修会（県農協会館）
- 10日 LA育成者研修会（県農協会館）
- 10日 運営委員会（県農協会館）



あおり通信

連絡先

農林水産省東北農政局

青森県拠点地方参事官室

TEL: 017-775-2151

— 農林水産省からJA関係者へ情報発信 —

農産物の環境負荷低減の「見える化」

農林水産省では、消費者に環境への負荷の低減が図られた農産物を選択してもらえるよう、「温室効果ガスの削減への貢献度合い」と「生物多様性保全への配慮」を星の数でラベル表示する「見える化」を進めています。



「みえるらべる」を貼った
ミニトマト



「見える化」ってどんなこと？

化学肥料・化学農薬や化石燃料の使用削減、バイオ炭やたい肥の施用、水管理（水田）などの生産者の栽培情報を用いて、定量的に温室効果ガスの排出と吸収を算定し、削減率に応じた星の数を「みえるらべる」へ分かりやすく表示します。

温室効果ガス削減への貢献

栽培情報を用い、生産時の温室効果ガス排出量を試算し、地域の慣行栽培と比較した削減貢献率を算定。

$$100\% - \frac{\text{対象生産者の栽培方法での排出量(品目別)}}{\text{地域の標準的栽培方法での排出量(品目別)}} \times 100 = \text{削減貢献率(\%)}$$

排出(農薬、肥料、燃料等)
ー吸収(バイオ炭等)

★ : 削減貢献率5%以上
★★ : // 10%以上
★★★ : // 20%以上



対象品目: 24品目

米、トマト(産地・施設)、キュウリ(産地・施設)、なす(産地・施設)、ほうれん草、白ねぎ、玉ねぎ、白菜、キャベツ、レタス、大根、にんじん、アスパラガス、ミニトマト(産地)、いちご(産地)、ピーマン(産地・施設)、リンゴ、温州みかん(産地・施設)、ぶどう(産地・施設)、日本なし、もち、ばいりしよ、かんしょ、茶

※ 栽培方法が不明なものは全て露地のみ

生物多様性保全への配慮

<取組一覧> ※米に限る

化学農薬・化学肥料の不使用	2点
化学農薬・化学肥料の低減(5割以上10割未満)	1点
冬期湛水	1点
中干し延期または中止	1点
江の設置等	1点
魚類の保護	1点
畦畔管理	1点

★ : 取組の得点1点
★★ : // 2点
★★★ : // 3点以上

「見える化」の詳細については
こちら！



https://www.maff.go.jp/tohoku/seisan/mieruka/mieruka_tohoku.html

ラベル裏面は「みえるらべる」です。今後店頭で「みえるらべる」が貼られた農産物が増えていきます。



組 織 農 政 通 信

農業者年金加入推進の取組み

農業者年金制度は「農業者の老後生活の安定および福祉の向上と農業者の確保に資すること」を目的とする公的年金で、農業者に広く門戸が開かれた制度です。昭和45年に創設し、平成13年に大改正が実施され現在の制度となりました。

現在の制度は「確定拠出型年金」(積立方式)となり、年金は終身年金となっています。一定の要件を満たした者に国庫による保険料補助があります。保険料は最大月6万7千円で全額社会保険料控除となるなどメリットも大きい制度となっています。また、令和7年度の運用利回りについては8.59%、現在の制度発足時から令和7年度までの保険料の運用利回りは平均で3.13%となっています。

1. 制度の周知

(独)農業者年金基金(以下「基金」と略)では、現在第5期中期目標期間(令和5年度～9年度)を設定し「若い農業者および女性農業者等への周知徹底、加入者累計15万人早期達成強化運動」を展開中です。

基金では農業者年金の新規加入者にアンケートを実施しており、加入前にどの程度農業者年金制度を知っていたかの問いに対し、「ほとんど知らなかった」「全く知らなかった」と回答した者が、約6割となっており若い人ほどその割合が高い傾向にあります。そのため、特に若い農業者や女性農業者への制度の周知を図る運動を展開しています。

2. 研修会の開催

基金では(一社)青森県農業会議、青森県農業協同組合中央会と共催で、各市町村段階の加入推進部長等を対象とした加入推進特別研修会を毎年開催しています。本年度は9月4日(金)に開催を予定しています。

研修会では、制度の説明、加入推進の方法、加入推進結果などを説明するほか、ファイナンシャルプランナー等の講演も予定しており、制度についての理解と、今後の加入推進運動に役立てることが出来ます。

3. 加入推進の現状

令和7年度の新規加入者は2,614人で、令和6年度から276人増加しました(表-1参照)。令和6年度は平成29年度以来7年ぶりの増加となりましたが、令和6年度・7年度と2年連続の増加となりました。青森県でも令和6年度より29人多い104人の新規加入者がありました。これは都道府県別でみると全国3位の加入者数となります。

本県の市町村農業委員会別実績では、弘前市農業委員会が女性新規加入者数の部で全国7位(9人の加入)、JA別実績ではJAでしょつがるが、女性新規加入目標達成率(目標数1～4人の部)で全国2位(目標2人に対して8人の実績・400%の達成率)となりました。

令和8年度も136人の新規加入者(うち39歳以下の若者78人、女性58人)を目標に取り組んでいます。

各市町村ともこれからが本格的な加入推進期間となりますので、各地区の加入推進部長を中心に農業委員、農業委員会、JAが協力して目標達成に向けて取り組んでいただきたいと思います。

表-1 新規加入者の推移(過去10年間)

年度	H28	H29	H30	R 1	R 2	R 3	R 4	R 5	R 6	R 7
全国	3,200	3,335	3,107	2,813	2,637	2,463	2,198	2,121	2,338	2,614
青森県	129	100	91	110	89	70	69	83	75	104

(中央会 農業対策部)

経営の窓口

現代の採用活動にSNSを！

1. はじめに

少子化や価値観の多様化が進む現在、組織が持続的に発展していくためには、次世代を担う人材の確保が最優先の課題となっています。JAグループにおいても、将来を担う人材を確保するためには、これまでの採用活動に加え、新たな情報発信の工夫が求められています。

今月は、SNSを活用した採用アプローチについて、その取組例を紹介いたします。

2. Instagram を活用した情報発信

SNSの中でもInstagramは、写真や動画を中心に情報を発信できるため、JAの雰囲気や仕事の魅力を伝える手段として活用しやすい媒体です。

例えば、若手職員の一日の仕事紹介、営農指導や金融・共済窓口などの各担当業務、職場の雰囲気や職員同士の交流、福利厚生の詳細等の内容を、SNSに発信することで若い世代に「JAで働くイメージ」を伝えることができます。また、採用情報だけではなく、「JAで働く人」に焦点を当てることも重要です。職員インタビューや仕事のやりがい、働くきっかけなどを紹介することで、求職者が自分自身と重ね、職場で働くことをイメージしやすくなります。InstagramはJAの魅力を継続的に発信できるツールとして、情報発信に活用しているケースが多くなっています。

3. 実践のヒントとなるSNS取組例

全国のJAや多くの企業が実践している情報発信を参考にしながら、自JAの取組みと比較・分析することで、強みや改善点が明確になることが、人材確保の課題解決に向けた第一歩と考えます。

・JA仙台

JA仙台では、採用に特化した情報をInstagramで発信し、採用試験や事業内容説明会の案内に加え、新採用職員の紹介などを行っています。「学生時代に何を軸に就職活動をしていたか」、「将来のビジョン」や入組のきっかけが分かり、JAで働く職員を身近に感じられる内容となっています。

・青森県庁

青森県においても、県公式InstagramやYoutube、X(旧Twitter)などを活用し、県政情報や観光、防災、イベント情報などを、写真や動画を交えながら日常的に幅広く発信しています。また、職員採用専用のInstagramも開設しており、採用試験の案内だけではなく、様々な部署の職員の仕事内容や雰囲気など、「実際に働く姿」が伝わる内容を積極的に紹介することで、社会人や、青森県へのU・Iターンを考えている方など、幅広い層へ情報を届けています。

4. SNS発信が生む効果

継続的に実際に働く職員の姿や仕事のやりがいなどのコメントを発信することで、実際の効果として、求職者へ視覚的に魅力が伝わるということでは、投稿1件あたり平均10～30%の印象理解度が向上し、企業への親近感が湧きます。また、フォロワーの約6～7割を20～30代が占めるなど、採用ターゲットである若年層へ効果的に情報を届けられます。採用コストについては、従来からの就職支援サイトや他媒体に広告費をかけるよりも安価であり、運用次第では広告費がかからないなど、コスト削減に繋がります。何よりも、入組後のミスマッチや早期離職の軽減に繋がり、離職率が5～15%改善した例も報告されています。

5. まとめ

県内JAにおいても、「更新の頻度が少ない」、「これから本格的にはじめたい」、「より効果的な発信方法を知りたい」という声が本会に寄せられています。採用活動とは、単に人員を補充する行為ではありません。組織の理念に共感してくれる仲間を増やしていくプロセスそのものです。JAには、地域に寄り添った活動や組合員との関わり、職員同士が協力して仕事を進める姿など、多くの魅力があります。しかし、こうした日々の取組みが、必ずしも求職者へ十分に届いているとは言えません。

「JAで働いてみたい」という想いを求職者に抱いてもらうためには、組織の内側にある魅力を、時代に合った手法で継続的に届ける必要があります。本会では、7月～9月にかけて、全3回で「採用力向上に向けてのSNS・AI活用実践セミナー」を開催し、本会としてセミナーで得たノウハウを今後各JAへお繋ぎするなどの支援に努めて参ります。

(中央会 経営対策部)

みんなが食べるものを 日本で作っていくことを 「国消国産」というよ。

わたしは美味ちゃん。
ハローキティと
いっしょに「国消国産」を
応援するよ！



今日のごはんで食べたものは
どこの国で作られたんだろう？

毎日食べているものが、
どこで作られたのか、
考えたことってある？
それはとても大事なこと
なんだよ。どうしてかな？



日本はたくさんの食べ物を
外国から買っているよ。

それがもしできなくなったら、
みんな困るよね。

だからふだんから、

みんなが食べるものは、
できるだけ日本でつくっていく
ことが大事なんだよ。



お米
はなし



お米は、どうやって 作られているんだろう？

お米ができるまで



収穫できるまでに、いろいろな作業があるよ。収穫できるのは、
基本的に1年に1回。お米は、農家さんが心をこめて作っているんだね。

みんなでお米を食べて
お米作りを応援しよう！

田んぼには、大切な役割があるよ。

田んぼは、雨が降ったときだけでなく、いつもゆっくりと
地下に水をしみ込ませているよ。それが地下水になるんだね。



美味ちゃん × HELLO KITTY

© みんなのよい食プロジェクト

© 2025 SANRIO CO., LTD. APPROVAL NO. L660539



耕そう、大地と地域の未来。 JAグループ

キッズあぐり塾 開校

～『三八地域の農業』『八戸伝統野菜』魅力発見！ 学ぼう！触れよう！楽しもう！～

J A 八戸は6月6日、八戸市農業生産振興センターで子どもたちが農業への理解を深める「キッズあぐり塾」を開校し、市内在住の小学生28人が参加した。また、今年入組した新人職員と2年目職員8人がリーダーとなり、塾生と一緒に農作業を体験した。

塾生はイチゴの収穫体験とジャガイモの芽かき作業に挑戦。真っ赤に実ったイチゴを丁寧に摘み取った。また、ジャガイモの芽かきでは、収量や品質を高めるために必要な作業であることを学び、真剣な表情で取り組んだ。塾生は「イチゴをたくさん収穫できて楽しかった」と語った。

収穫体験終了後には、リーダーが「枝豆をそのまま育てると何になるか」「ながいもをすりおろした食べ物は何か」など野菜クイズを出題し、塾生は元気に回答した。

キッズあぐり塾は『三八地域の農業』『八戸伝統野菜』魅力発見！学ぼう！触れよう！楽しもう！』をキャッチフレーズに、三八地域の農業について理解を深めていただくため、次世代に向けた活動を進めている。市と連携し、三八地域の主力品目や八戸伝統野菜である「食用菊」や「糠塚きゅうり」に触れる環境を提供しており、市と連携し開催するのは6回目となる。

塾長を務める若林政秀組合長は「お米や野菜、果物、お肉などを食べることで大きくなり、食べ物から元気をもらっている。皆さんが元気になれば、周りの友達や家族も元気になる。このキッズあぐり塾で、野菜を収穫したり食べたりすることを、もっともっと好きになってほしい」と呼びかけた。



イチゴの収穫を楽しむ塾生



ジャガイモの芽かきに挑戦



野菜クイズを出題するリーダー



輝き

JA全農あおもり
営農部営農支援課
よしだ みゆ
吉田 未夢 さん

●プロフィール

2026年4月から勤務 蓬田村出身 23歳

— 働くきっかけは？ —

全農の仕事研究でグループワークに参加した際、他の参加者は農業に詳しく、私には知識が少なく内容についていくのが大変でした。その経験が悔しく、「もっと農業について学びたい」という思いが強くなり、入会を志望しました。

— 業務内容を教えて下さい。 —

主にGAP、鳥獣害対策の業務に取り組んでいます。GAP業務では、環境に配慮したサステナブルマルチの試験を行います。通常のサステナブルマルチと環境にやさしい紙マルチの比較結果が気になります。

— 働いた感想は？ —

分からないことも多く、日々学びながら業務に取り組んでいます。部長から依頼された案件について自分なりに考えた意見を提案した際、「いいね」と言っていただけたことがとても印象に残っています。その経験から、自分の考えを持って仕事に取り組むことの大切さを実感しました。

— 仕事をする上で、日頃心がけていることは？ —

分からない単語や言葉はメモして調べたり先輩に聞いたりしています。必死に食らいついていくという精神で勉強していくことが大切だと思っています。また、何事にも興味、関心をもって業務を遂行することも意識しています。

— 特技・趣味は？ —

趣味は読書とボウリングです。好きな小説は辻村深月さんの『傲慢と善良』で、何度も読み返しています。ボウリングでは、調子が良いときには最高スコア180点を記録したことがあります。

— あなたが自慢できることは？ —

私の強みは集中力です。読書に夢中になると、気づけば2時間経っていたり、80ページ以上読み進めていたりすることがあります。また、話し役にも聞き役にもなれることも強みです。自分が話すときは明るく会話を盛り上げ、相手が話すときはしっかり耳を傾けることを大切にしています。

— 将来の夢は？ —

担当業務を通じて、環境保全や持続可能な農業の推進に貢献し、SDGsの達成に役立てる人材になることが目標です。プライベートでは、全国の書店を巡りながらさまざまな本と出会いたいと考えています。また、いつか京都府を訪れてみたいです。講習会などを通じて京都の全農やJAの職員の方々と交流したことがきっかけで、京都に興味を持つようになりました。



津軽みらい農協特A米 プレミアム研究会 技術磨き地域けん引

津軽みらい農協特A米プレミアム研究会会長の横山英樹さんの田んぼで田植えをする作業員



津軽みらい農協特A米プレミアム研究会は平成21年に、特Aクラスの良食味米生産を目指し、生産技術の研究・向上を目的に設立された。設立当初は、全国で「特A」評価米が増えているなか、青森県では特Aを獲得できていなかったため「つがるロマン」での米食味ランキング特A取得を目指していた。

転機が訪れたのは平成25年度。「あおもり米特Aプロジェクト事業」における新系統「青系187号」の現地試験への協力として同研究会より6人が良食味米の生産に携わり、のちに「青天の霹靂」と名付けられた。平成26年には施肥改善など更に徹底した栽培管理が行われ、平成27年2月には参考品種ながら県念願の特Aを取得。同年には本格デビューを果たした。

現在は26人の会員で運営されている。青天の霹靂生産者のうち、農薬や化学肥料の使用量を通常の5割以下に減らして生産する「特別栽培米」生産者や、地域の筆頭となる生産者が会員となっている。年2回開催される現地講習会への参加や、環境配慮型農業の先進事例の視察、卸業者への視察、意見交換会などを行い、良食味米生産への意識を高く持ち、生産技術の向上へと繋げている。

新風

JA八戸

課題はねのけ
持続可能な農業経営を目指す

会社員として長年働いた後、「人生の後半は新しいことに挑戦したい」という思いから農業の世界へ飛び込んだ下沢隆幸さん。現在はナガイモやネギ、水稻を栽培しながら、日々、農業技術の習得に励んでいる。

就農のきっかけは、休日に実家のナガイモ収穫を手伝ったことだった。自ら収穫したナガイモを一から作ってみたいという気持ちが強まり、思い切って就農を決意。

近年、気候変動による高温や豪雨、資材価格の高騰など、農業を取り巻く環境は厳しさを増している。下沢さんは、地域の農家やJAとのつながりを大切にしながら、栽培技術や知識を学び続けている。「作業の工程が理解できるようになり、思い描いた通りの作物が収穫できたときの達成感が何よりのやりがいだ」と話す。

また、「仕事に追われるのではなく、自ら先を読んで仕事を進めること」を心掛け、日々の積み重ねを大切にしている。将来的にはスマート農業など新しい技術も積極的に取り入れ、効率的で持続可能な農業経営を目指したいと考えている。

「無理をせず、長く続けられる農業を目指したい」と語る下沢さん。その言葉には、農業への情熱と堅実な歩みへの決意が込められている。これからも地域農業を支える担い手として、さらなる活躍が期待される。



ナガイモの植付作業に励む下沢さん

後編 記集

今夏の始めの頃は例年より涼しかったですが、やはり暑くなりましたね。ただ、昼夜の寒暖差が大きいのでメロンやスイカが甘いみたいで、お盆などに食べたいと思っています。

7月下旬に「安潟みなとまつり」（青森市 青い海公園）に行ってきました。まつりではよさこい踊りなどのステージイベントや海上自衛隊の護衛艦「ゆうぎり&おおよど」の一般公開などもされました。初めて護衛艦の甲板に乗らせていただきましたが、ミサイルや大砲を撃つ設備



▲ステージイベント

が整えられていました。

その他にも花火大会やボートに乗って陸奥湾を軽く一周するイベントもやっていたり、とても賑わっていましたので、ご家族で行ってみてはいかがでしょうか。

Have a nice August (克)



▲護衛艦ゆうぎり



▲護衛艦おおよど

ホームページアドレス

- JA青森中央会 <https://www.ja-aomori.or.jp/chuoukai/>
イベントの様子、歳時記、産直・JA情報などをご覧ください。
- JAバンク青森 <https://aomori.jabank.org>
商品・サービスのご案内のほか、マネーシミュレーションや全国のJAバンクへのリンク等をご覧ください。
- JA全農あもり <https://www.zennoh.or.jp/am/>
生産量日本一のりんご・にんにく・ごぼうをはじめとした農畜産物情報や活動状況、中古農機情報を紹介しております。
- JA共済連青森 <https://www.jakyosai-aomori.jp>
JA共済のご案内のほか、地域貢献活動の取組を紹介しております。

営農にますます役立つアプリに

「日本農業新聞ニュースアプリ」がリニューアル! 新機能を追加し、操作性も向上しました。
好みに合わせてカスタマイズでき、情報収集がより便利になります。

新機能
1

病害虫診断

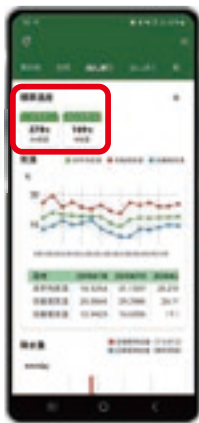
スマートフォンで撮った写真から、農作物の病気や害虫をAIで判定することができます。
対応品目は、トマト、ブドウ、イチゴ、キュウリ、タマネギ、ジャガイモ、ナス、桃、ピーマン、菊、大豆、カボチャの12品目です。



新機能
2

気象情報

1週間の天気予報に加え、1キロ四方単位の詳細な気温、降水量、日照時間のデータ(過去7日間+今後7日間)を見ることができます。また、栽培品目の積算温度も計算できます。



新機能
3

Myカテゴリ

関心のある用語や、栽培品目、市町村名、JA名などを登録すると自分だけのカテゴリを作成できます。カテゴリには自動で記事が分類され、読みたい記事を手軽に探せます。



※本サービスは人工知能(AI)技術および外部データベース等を活用した参考情報の提供であり、診断の正確性・有効性について当社は一切の責任を負いかねます。ご自身の責任において判断し、ご利用ください。

アプリダウンロードはこちら

右記QRコードを読み込み、日本農業新聞公式ウェブサイトからアプリダウンロードにお進みいただけます。



※アプリのダウンロードには「Apple ID」または「Googleアカウント」が必要となります。 ※App StoreはApple Inc.のサービスマークです。 ※Google PlayはGoogle LLCの登録商標です。

アプリの利用について

- アプリ内で全ての記事・機能を利用するには、電子版有料会員登録(月額2,403円)が必要です。
- 電子版有料会員の方は、アプリを利用する前にブラウザ版でログインして会員登録を受けてください。会員登録がないと、アプリ内の一部の機能が利用できません。
- ※過去一度でもブラウザ版でログインしたことがある方は認証済みです。

紹介動画はこちら



お問い合わせ

日本農業新聞 電子版事務局
dkanri@agrnews.co.jp



家の光

IE no HIKARI

「食と農」「暮らし」「協同」「家族」を柱に
「人生100年時代」の元気づくりを応援していきます!



読者に寄り添い
より身近で活用しやすく

お申し込みはお近くのJAへ

誌名	定価(税込) ※毎号統一価格
家の光	900円

JAグループ 家の光協会 〒162-8448 東京都新宿区市谷船河原町11 TEL 03-3266-9039 <https://www.ienohikari.net/>